

Kohda Aya



# 崩れ

第4回企画展

崩れ ー幸田 文が訪ねた日本の大崩壊地ー



立山カルデラ砂防博物館

## はじめに

「崩れ」という言葉から何を連想されますか。  
これまで、どちらかという自然科学の眼で捉えられ、記録されることの多かった「崩れ」。

しかし、作家 幸田 文は「崩れ」に出会い、そのエネルギーに圧倒され、恐れとともに感動をも覚えました。そして、文学の眼で「崩れ」を表現しました。

本企画展では、幸田 文がその鋭い感性で書き上げたルポルタージュ『崩れ』をとおして、立山カルデラをはじめとする日本の大規模崩壊地を新しい視点で紹介します。

幸田 文の文章に触れながら、「崩れ」について、捉えなおしてみたいかがでしょうか。

1999年10月 立山カルデラ砂防博物館

## 目次

幸田 文の崩壊地巡り.....	3
幸田 文.....	4
娘から見た幸田 文.....	5
立山カルデラに立つ幸田 文 文学碑	
立山カルデラと常願寺川.....	6
幸田 文 立山カルデラ取材の足跡.....	7
立山カルデラ砂防今昔	
崩れ紹介 鷲崩れ(富山県).....	8
大谷崩れ(静岡県).....	10
由比地すべり(静岡県).....	12
大沢崩れ(静岡県).....	14
松之山地すべり(新潟県).....	16
大難崩れ(栃木県).....	18
稗田山崩れ(長野県).....	20
桜島(鹿児島県).....	22
有珠山(北海道).....	24
座談会「幸田 文と立山カルデラ」.....	26
おわりに.....	32

## 幸田 文の崩壊地巡り

1976（昭和51）年11月から77（52）年12月まで「婦人之友」に14回にわたって連載された『崩れ』は、72歳の幸田文が1年間余り、日本中の「崩れ」の現場を訪ね、向かい合って書きあげたルポルタージュである。

「因果なことである。なぜこんな年齢になってから、こういう体力のいることへ心惹かれたのか、因果というほかない。人は老いれば、心おだやかに身を休めて暮らすのが常識だ。それを私の場合は、逆になってしまった。樹木も崩壊も、呼べば来てくれるというものじゃない、どうあろうとこちらから出て行かなくては、逢えない代物なのだ。木も好き、山崩れも知りたい、山の道を歩くのもたのしい。ただ残念なのは老いたからであり、老いてからこういうことに心惹かれた巡り合わせである」と書くが、作者の「崩れ」行きは9回に及ぶ。

「崩れ」との出会いが偶然だった。1976年5月、安倍峠に楓の純林があり、その芽吹き of 爽やかさを聞いて早速出かけた幸田 文は、翌日、山菜採りに安倍川支流の大谷川を溯り、そこで目にした光景に息を呑む。

「浅みどり濃みどり、黄緑赤緑」があふれている山並に標高2,000メートルの大谷嶺が、「山頂すぐ下のあたりから壊れて、崩れて、山腹から山麓にかけて、斜面いちめんの大面積に崩壊土砂がなだれ落ち」、車から降り立った地面も流出土砂の末だった。気を呑まれて立ちつくし、その無惨で近づきたい畏怖に作者は向かい合う。

子供の頃、隅田川の土手下に住み、秋の嵐のたびに川が暴れる風景を知っていたこと、しかも自然の「乱れ、崩れ、こわれ、荒れはて」に真正面から向かわせ、それらを「しのご」ことが好きだった父親の影響、十代に浴衣がけて登った浅間山で、林の中で崖から滑り落ち、仰向けになったまま谷川の強い水音を聞いた記憶、19歳の誕生日に関東大震災にあったこと、あるいは二十代、結婚して住んだ芝区伊皿子の町中の家で、裏の崖崩れに家半分を埋められた経験、さらに六十代に近い頃、幸田 文は新潟県東頸城郡松之山町の広範囲な地すべりに町がほとんど崩壊したニュースがもうひとつ納得できずに現地へ行き、ひりひりするような痛みの中で取材しながらも結局は書くことができなかった。

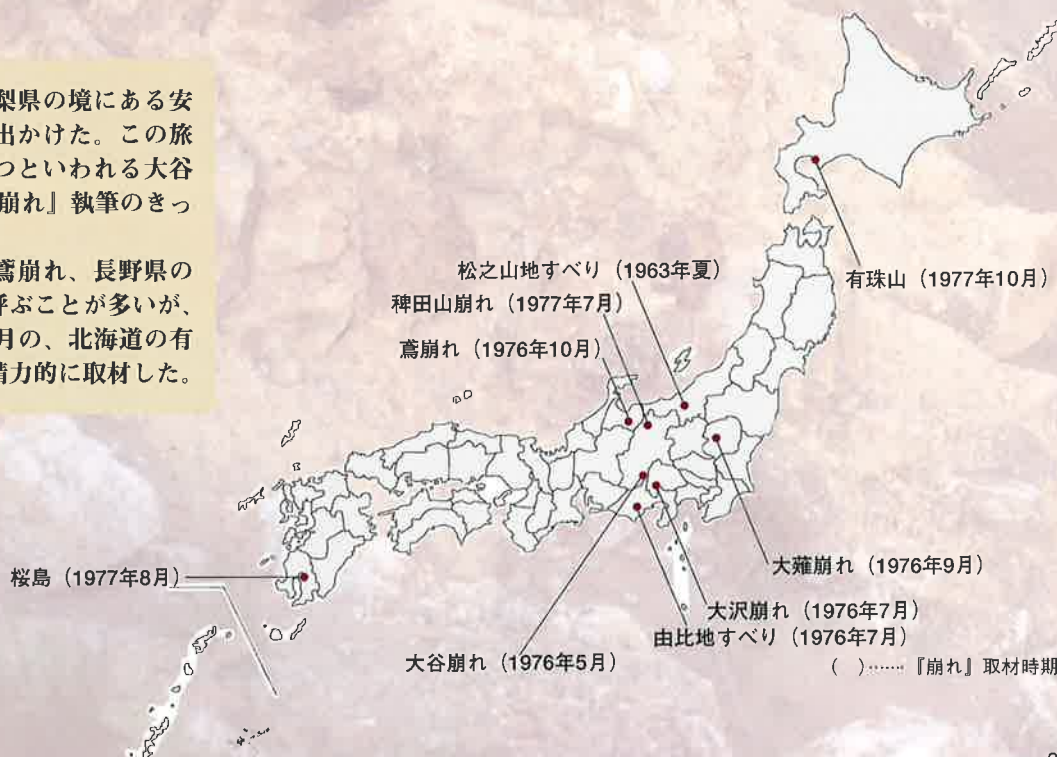
「土の崩れは、まざまざと人を崩している」という思い、「毎日少しずつ、徐々に、そして持続的に、大地が低い方へと移動し続け、従って家屋などの破壊も、一度にめりめりという壊滅のしかたではなく、じりじりと、しかし確実に土地も山林も家屋敷も破壊へさして動かされていた。激烈と緩慢と一思えば大地の動くということの恐ろしさ。」

こうした記憶や体験、思いがひとつになって、まさに発芽の時を待っていたのだろう。大谷崩れの寂しさに食い込まれ、荒廃へいそぐ谷水にせつなくほだされ、幸田 文の内の芽は土を押し破り、この「崩れ」を完成させたのだった。

『崩れ』を読む 尾形明子（東京女学館短期大学教授）より

1976年5月、静岡県と山梨県の境にある安倍峠に、楓の純林を見に出かけた。この旅の途中、三大崩れのひとつといわれる大谷崩れと出会ったことが、『崩れ』執筆のきっかけであった。

大谷崩れ、富山県立山の鳶崩れ、長野県の禰田山崩れを三大崩れと呼ぶことが多いが、それらを含め、1977年10月の、北海道の有珠山まで、全国の崩れを精力的に取材した。



# 幸田 文



明治37年（1904年）9月1日、父幸田露伴、母幾美子の次女として、東京東向島に生まれる。東京麹町の女子学院に学びながら、父に家事や身の周りの厳しい躰を受けた。昭和3年結婚。10年間の結婚生活の後、長女玉を連れて、幸田家に戻る。

昭和22年、幸田露伴逝去、「芸林閒歩」（露伴先生記念号）に「雑記」を寄稿し好評を博す。その後、『父—その死—』『こんなこと』『みそつかす』等を出版。昭和30年発表の長篇小説『流れる』で日本芸術院賞・新潮文学賞受賞。短篇集『黒い裾』で読売文学賞。ほか『さなみの日記』『ちぎれ雲』『包む』『笛』『おとうと』『身近にあるすきま』『番茶菓子』『猿のこしかけ』『駅』『草の花』『鬨』（女流文学賞）等出版。

昭和51年、日本芸術院会員に選ばれる。平成2年10月31日逝去。86歳。

没後、『崩れ』『木』『台所のおと』『きもの』『季節のかたみ』『雀の手帖』『月の塵』『動物のぞき』がある。

## 年譜・作品

年号	年齢	年譜・作品
明治37年（1904）		9月1日、父幸田露伴、母幾美子の次女として、東京府南葛飾郡寺島村（現・墨田区東向島）に生まれる。
明治43年（1910）	6歳	4月8日、母幾美子が死去。
明治44年（1911）	7歳	2月、父露伴が文学博士号を受ける。
大正元年（1912）	8歳	5月、姉歌が死去。11月、児玉八代子を新しい母として迎える。
大正12年（1923）	19歳	9月1日、関東大震災に遭い、同月3日に千葉県四街道の岡倉一雄方に避難。
大正15年（1926）	22歳	11月、弟成豊が死去。12月末からチフスに感染、翌月には全快した。
昭和3年（1928）	24歳	12月、山本直良の媒酌で、新川の清酒問屋三橋家の三男、幾之助と結婚。芝区伊皿子町（現・港区三田4丁目）に住む。
昭和4年（1929）	25歳	11月30日、女兒を出産し、玉と命名する。
昭和13年（1938）	34歳	5月、三橋幾之助と離別し、玉を連れて実家にもどる。
昭和22年（1947）	43歳	7月30日、父露伴が死去。8月、「芸林閒歩」（露伴先生記念号）に「雑記」を寄稿。
昭和31年（1956）	52歳	『黒い裾』で第7回読売文学賞を受賞。『流れる』で第3回新潮文学賞を受賞。
昭和32年（1957）	53歳	『流れる』で第13回日本芸術院賞を受賞。中央公論社より『おとうと』を刊行。
昭和48年（1973）	69歳	『鬨』で第12回女流文学賞を受賞。
昭和51年（1976）	72歳	10月、『崩れ』取材で立山カルデラを訪れる。11月「婦人之友」に「崩れ」を連載（翌年12月完結）。日本芸術院会員に選ばれる。
平成2年（1990）	86歳	10月29日、心筋梗塞の発作を起し、31日午前3時40分、心不全のため死去。
平成3年（1991）		『崩れ』出版。

## ● 幸田文の主要著書

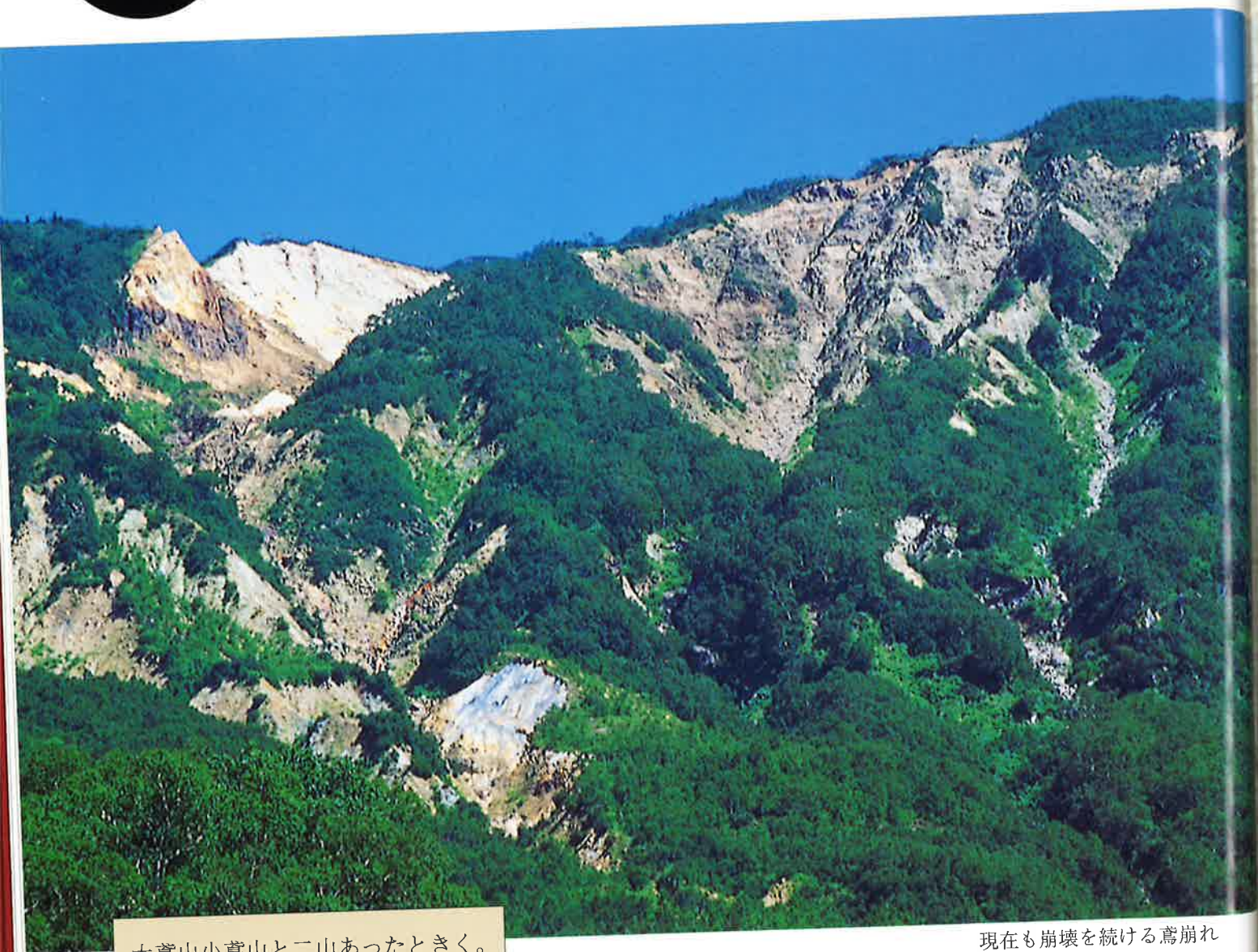
### ◆ 単行本

父—その死—	昭和24年12月	（中央公論社）
こんなこと	昭和25年8月	（創元社）
みそつかす	昭和26年4月	（岩波書店）
黒い裾	昭和30年7月	（中央公論社）
流れる	昭和31年2月	（新潮社）
さなみの日記	昭和31年4月	（中央公論社）
ちぎれ雲	昭和31年6月	（新潮社）
包む	昭和31年12月	（文芸春秋新社）
笛	昭和32年7月	（中央公論社）
おとうと	昭和32年9月	（中央公論社）
身近にあるすきま	昭和32年10月	（角川書店）
番茶菓子	昭和33年4月	（東京創元社）
猿のこしかけ	昭和33年9月	（新潮社）
駅	昭和34年3月	（中央公論社）

草の花	昭和34年10月	（中央公論社）
鬨	昭和48年6月	（新潮社）
崩れ	平成3年10月	（講談社）
木	平成4年6月	（新潮社）
台所のおと	平成4年9月	（講談社）
きもの	平成5年1月	（新潮社）
季節のかたみ	平成5年6月	（講談社）
雀の手帖	平成5年12月	（新潮社）
月の塵	平成6年4月	（講談社）
動物のぞき	平成6年6月	（新潮社）

### ◆ 全集

幸田文全集	全7巻	昭和33年7月～34年2月	（中央公論社）
幸田文全集	全23巻	平成6年12月～9年2月	（岩波書店）



大鳶山小鳶山と二山あったときく。立山連峯に含まれる。安政5年(約120年前)にこの二山が地震による大崩壊を起こし、大量の土砂を押し出し、このため下流にあたる常願寺川はひどい洪水になり、以来、山も川もずっと暴れ続けてきた、という歴史をもつ。

(『崩れ』より)

現在も崩壊を続ける鳶崩れ

## 座談会◎『幸田 文と立山カルデラ』



【吉友】今日は大崩壊地の多枝原平の展望台にたたずんで、幸田文先生がどのようにお感じになったのか。すごい崩れの地にお立ちになったときのことをしのびながら、お話が進んでいけばいいなという気持ちでおりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

幸田先生は洋服がお嫌いだったようですが、そのあたりのお話からはじめていただけますか。



青木 玉  
作家、幸田 文の長女

【青木】もう、ここへ来る頃には抵抗なんて言っていられませんが、人様の背中まで拝借して出ていくのですから、気持ちは納まっていたと思います。行く度に気持ちが悪い、洋服のここがすれるとか、些末なことはあります。だけど、そういう格好で行かなければならない場所だということも認識できてるし、もう自分の

感覚など捨ててしまっていて、行って見るということが一番です。見られるか見られないか、行けるか行けないか、そのことだけに掛かっていますから。

だから、私に文句はいっぱい言いますが、結果としては行って見られれば満足ということですよ。

【吉友】そういういろんな気持ちを混ぜ合わせながら、幸田先生は「でも行ってみたい」というね。先生はそのことをお感じだったのでしょか。

【尾形】この『崩れ』という作品を拝読していると、底無しのある恐ろしさみたいなものを私感じるんですよ。ものすごさを感じる。それは「崩れ」というのはやっぱり、幸田先生、2種類の崩れをこの中で見てらっしゃって、1つは日常的にずっと慢性的に崩れていく。でも、住んでいる人は気付かない。でも、確実に崩れて崩壊していく。そういった崩れ。もしかしたら、そこにご自分の命、人間というのはそういうところありますよね。それをご覧になっていた。そして、ご自分の70という年齢